校異源氏物語・かゝり火

このころ世の人のことくさに内のおほいとのゝいまひめ君とことにふれつゝいひちらすを源氏のおとゝきこしめしてともあれかくもあれ人みるましくてこもりゐたらむ女こをなをさりのかことにてもさはかりにものめかしいてゝかく人にみせいひつたへらるゝこそ心えぬことなれいときは　くしうものし給ふあまりにふかき心をもたつねすもていてゝ心にもかなはねはかくはしたなきなるへしよろつの事もてなしからにこそなたらかなるものなめれといとおしかり給ふかゝるにつけてもけによくこそとおやときこえなからもとしころの御心をしりきこえすなれたてまつらましにはちかましきことやあらましとたいのひめ君おほししるを右近もいとよくきこえしらせけりにくき御心こそゝひたれとさりとて御心のまゝにをしたちてなともてなし給はすいとゝふかき御心のみまさり給へはやう　くなつかしうゝちとけきこえ給ふ秋になりぬはつかせすゝしくふきいてゝせこか衣もうらさひしき心ちしたまふにしのひかねつゝいとしは　くわたり給ておはしましくらし御ことなともならはしきこえ給ふ五六日の夕つく夜はとくいりてすこしくもかくるゝけしきおきのをともやう　くあはれなる程になりにけり御ことをまくらにてもろともにそひふし給へりかゝるたくひあらむやとうちなけきかちにて夜ふかし給ふも人のとかめたてまつらむ事をおほせはわたり給ひなむとて御まへのかゝり火のすこしきえかたなるを御ともなる右近のたいふをめしてともしつけさせ給ふいとすゝしけなるやり水のほとりにけしきことにひろこりふしたるまゆみの木のしたにうちまつおとろ　くしからぬほとにをきてさしゝりそきてともしたれは御前のかたはいとすゝしくおかしきほとなるひかりに女の御さまみるにかひあり御くしのてあたりなといとひやゝかにあてはかなる心ちしてうちとけぬさまにものをつゝましとおほしたるけしきいとらうたけなりかへりうくおほしやすらふたえす人さふらひてともしつけよなつの月なきほとはにはのひかりなきいとものむつかしくおほつかなしやとのたまふ

かゝり火にたちそふこひのけふりこそよにはたえせぬほのをなりけれいつまてとかやふすふるならてもくるしきしたもえなりけりときこえ給ふ女君あや

しのありさまやとおほすに

行ゑなき空にけちてよかゝり火のたよりにたくふけふりとならはひとのあやしとおもひ侍らむことゝわひたまへはくはやとていて給ふにひんかしのたいのかたにおもしろきふえのねさうにふきあはせたり中将のれいのあたりはなれぬとちあそふにそあなる頭中将にこそあなれいとわさともふきなるねかなとてたちとまり給ふ御せうそこなたになむいとかけすゝしきかゝり火にとゝめられてものするとのたまへれはうちつれて三人まいり給へりかせのをと秋になりけりときこえつるふえのねにしのはれてなむとて御ことひきいてゝなつかしきほとにひき給ふ源中将はゝむしきてうにいとおもしろくふきたり頭中将心つかひしていたしたてかたうすをそしとあれは弁少将ひやうしうちいてゝしのひやかにうたふこゑすゝ虫にまかひたりふたかへりはかりうたはせ給て御ことは中将にゆつらせ給つけにかのちゝおとゝの御つまをとにおさ　くおとらすはなやかにおもしろしみすのうちにものゝねきゝわく人ものし給らんかしこよひはさかつきなと心してをさかりすきたる人はゑひなきのついてにしのはぬこともこそとのたまへはひめ君もけにあはれときゝたまふたえせぬなかの御契をろかなるましきものなれはにやこの君たちを人しれすめにもみゝにもとゝめ給へとかけてさたに思ひよらす此中将は心のかきりつくして思ふすちにそかゝるついてにもえしのひはつましき心ちすれとさまよくもてなしておさ　くこゝろとけてもかきわたさす